

応用研究論文

農業経営者人材育成支援への取り組み

—未来農業のフロンティア研修・次世代農業経営者ビジネス塾の事例—

藤井吉隆¹，渡部岳陽²，上田賢悦³

¹ 秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス学科

² 秋田県立大学生物資源科学部生産環境学科

³ 秋田県農業試験場

農業経営を取り巻く環境が変化中、優れた経営感覚を持って経営の革新に取り組む農業経営者を育成するなど農業経営を担う人材力の強化が農政の重要な課題となっている。秋田県においても、経営の成長・発展段階に応じた種々の研修制度を実施しているが、今後は、これらの充実と強化を図っていくことが求められる。筆者は、現在、秋田県関係部局と連携して農業経営人材育成支援の取り組みを実施している。そこでは、就農希望者を対象とする「未来農業のフロンティア研修」、就農後の農業者を対象とする「次世代農業経営者ビジネス塾」の運営に参画し、受講者が「事業としての農業経営」を実践する上で重要となる 1)事業計画の策定、2) 営農計画シミュレーション、3)経営マネジメントの高度化を図るための手法の研究開発などに取り組み、受講者の評価が高いなどの有用性を確認した。今後は、これらの取り組みが農業経営の成長・発展につながるよう実践性の向上を図るとともに、より効果的な農業経営者人材育成の制度設計につなげていくことが課題である。

キーワード：農業経営者人材育成支援，事業計画策定，営農計画シミュレーション，経営マネジメントの高度化

農業経営を取り巻く環境は、年々厳しさを増している。筆者は、これまで多くの経営調査を行ってきたが、厳しい経営環境の中で、収益性の低下に直面する農業経営がある一方、収益性が高い農業を実践する農業経営もあるなど経営体間の格差が顕著となっている。

収益性が高い農業経営では、農作物の栽培に関わる高度な知識・技能を有することは勿論、今後の経営の方向性を明確にした経営のビジョンを構想し、その実現に向けた課題を解決するために、一步一步着実に経営改善に向けた取り組みを実践していることに特徴がある。

今後、我が国の農業経営の持続的な成長・発展を図るためには、優れた経営感覚をもって経営の革新に取り組む農業経営者を育成することの重要性が高まっている。こうした状況の中、近年、全国の自治

体、金融機関などが主催する農業経営をテーマとした経営セミナーなどへの取り組みが活発化しており、大学がこれらの取り組みに主体的に関わる事例もみられる。

農林水産省においても、農政の重要課題として次世代の農業を担う「人材力の強化」を位置付け、今後の農業界を牽引する優れた経営感覚を備えた担い手を育成するために、地方の農業者が営農しながら体系的に経営を学ぶ場（農業経営塾）を開講する事業に着手している（農林水産省、2016）。

このように農業経営者人材育成への取り組みが本格化する中、農業に関わる研究・教育に携わる者としてこれらの取り組みに参画することは、①農業経営者などの実務家に対して研究成果をフィードバックする地域貢献の場、②研究ニーズの探索や研究のブラッシュアップを図る場、③上記を通じた教育へ

の反映などの各場面で大きな意義を有する。

本稿では、筆者が秋田県関係部局と連携して運営に携わっている農業経営者人材育成支援への取り組み（未来農業のフロンティア研修、次世代農業経営者ビジネス塾）の現状と課題について報告する。

秋田県における農業経営人材育成体系

秋田県における農業経営人材育成体系を図1に示す。秋田県では、「就農準備段階」から「経営継承段階」まで、それぞれの段階に応じた研修制度を実施している。

まず、「就農準備段階」では、「未来農業のフロンティア研修制度」、「地域で学べ！農業技術研修」がある。これらの研修は、就農希望者を対象に秋田県の関係機関や農業法人、先進農家で行う実地研修と座学研修をとおして就農に際して必要となる作物栽培・家畜飼養に関わる知識・技術および農業経営に関わる知識・手法の習得を図ることを目的に実施しているものである。

次に、「就農開始段階」では、秋田県内に設置されている地域振興局普及指導員が農業青年の栽培技術の向上を図るための講座制研修や、普及指導員などによる個別のフォローアップへの取り組みが行われている。

「経営確立段階」では、秋田県と本学の共催により取り組んでいる「次世代農業経営者ビジネス塾」がある。次世代農業経営者ビジネス塾では、本学および秋田県農業試験場職員が講義全体をコーディネートしながら、次代を担う農業経営者、農業への参入を検討している他産業事業者などに対する「新たな学び直しの間」を提供することを目的に実施している。

「経営継承段階」では、秋田県農業法人化推進協議会が主体となり、経営者から後継者への経営継承を円滑に進めるための計画策定やセミナーなどへの取り組みを実施している。

筆者は、2015年の本学着任後、2014年から共著者が中心となり開講した「次世代農業経営者ビジネス塾」の運営に携わり、2016年からは、①「次世代農業経営者ビジネス塾」の講師および企画運営、②秋田県が実施する「未来農業のフロンティア研修」における講師を担当している。また、2016年度は、本学が実施する産学連携共同研究推進事業の採択を受け、共著者と農業経営者人材育成体系構築に向けた研究に取り組んでいる。併せて、秋田県が設置する「新たな農業の担い手教育体系構築に向けた検討会」のメンバーとして、秋田県における今後の担い手教育体系の検討などに取り組んでいる。

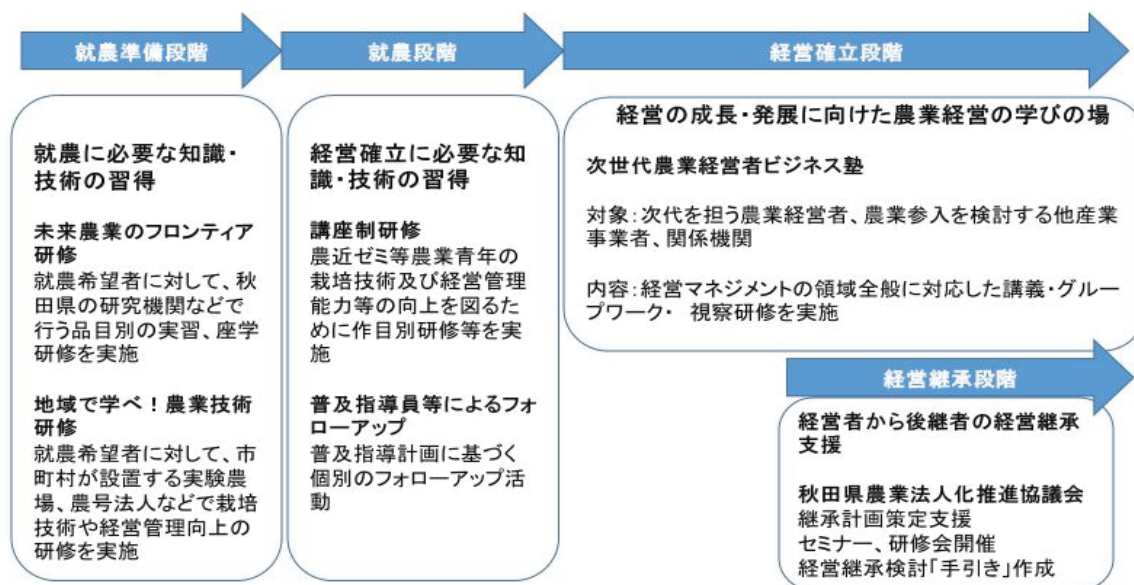


図1 秋田県における担い手育成の体系

資料：秋田県農林政策課作成資料をもとに筆者が作成。

取り組みの概要

以下に、本稿で取り上げる「未来農業フロンティア研修」、「次世代農業経営者ビジネス塾」の概要を示す。

未来農業のフロンティア研修

「未来農業のフロンティア研修」は、秋田県が実施する就農希望者を対象とした2年間の研修制度である。研修のカリキュラムは、就農希望者が就農予定品目に応じて農業試験場など秋田県内の関係機関で専門分野別研修を行うとともに、農業経営、農業政策などの共通分野研修を組み合わせた内容となっている。

研修生は、非農家出身者や農業後継者などの就農希望者で構成されている。2016年度の研修生は合計35名（1年目生14名、2年目生21名）となっており、年齢構成は、10歳代9名、20歳代17名、30歳代8名、40歳代1名である。

筆者は、研修を担当する秋田県農業研修センターからの要請を受け、2016年度から共通研修「私の営農計画策定」の講義を担当することとなった。これまでの「私の営農計画策定」では、就農後の農業経営に関連する制度や秋田県が策定した経営類型別経営指標などを用いた講義・演習が行われていた。しかし、秋田県農業研修センター担当者が就農準備段階から、将来の農業経営の方向性を検討し、経営感覚を養成する必要があるとの問題意識から筆者への協力要請があった。

そこで、秋田県農業研修センター職員と協議を行い、2016年度は、筆者が合計4回（各回4時間、1年目生3回、2年目生1回）の講義を担当することとなった。講義では、①経営理念や経営環境分析を通じた経営の展開方向の検討、②経営シミュレーションによる営農計画の具体化をテーマとした内容に変更して、講義を実施した（表1）。

講義では、筆者がこれまでの業務で取り組んできた農業経営版事業計画策定手法、営農計画シミュレーション手法について、全国のトップランナー経営の事例紹介を交えながら解説し、受講生の就農後の農業経営を想定した個人演習、グループ討議を組み

合わせて実施した（図1、図2）。

表1 「私の営農計画」作成研修

学年	月日	内容	講師
1年目生	5月10日	経営理念の策定	秋田県立大学 藤井吉隆
		「私の営農計画」様式説明	農業研修センター職員
	6月28日	現状分析手法(SWOT分析)	(有)GFC 佐藤善友氏
	9月5日	経営環境分析とクロス分析	秋田県立大学 藤井吉隆
	9月6日	経営シミュレーション	秋田県立大学 藤井吉隆
2年目生	9月21日	「私の営農計画」入力作業	農業研修センター職員
	5月12日	営農計画のブラッシュアップ	秋田県立大学 藤井吉隆
	6月28日	現状分析手法(SWOT分析)	(有)GFC 佐藤善友氏

資料：農業研修センター資料をもとに筆者作成



図2 講義の様子



図3 演習の様子

次世代農業経営者ビジネス塾

次世代農業経営者ビジネス塾は、本学と秋田県により2014年度から開始した主に経営確立期の農業

経営者を対象とした研修制度である。取り組みの契機は、共著者である秋田県農業試験場上田主任研究員、本学生産環境学科渡部准教授が県内農業経営者との関わりの中で、農業経営者から「学びなおしの場」を構築してほしいとの要請を受けて取り組んだものである。

次世代農業経営者ビジネス塾では、経営能力と実践力を伴った農業経営者の育成を目指して、①農業経営に関わる知識の理解・習得、②農業経営者としての“ふりかえり”を通じた経営観の明確化、③受講者同士の討議を通じたコミュニケーション能力の向上を教育目標に設定している（上田ら、2016）。

2016年度の受講生は合計37名、年齢構成は、20歳代3名、30歳代21名、40歳代12名、50歳代1名、属性は、農業経営者31名、農業への参入を検討する事業者2名、関係機関4名（市役所、金融機関）となっている。

今年度は、2016年6月～2017年3月の期間に、事業計画の策定を基軸にして、財務会計マネジメント、生産マネジメント、人材マネジメント、財務会計マネジメント、マーケティングマネジメントなど経営管理の幅広い領域を対象に合計17回実施している（表2）。

カリキュラムの設計に際しては、共著者および秋田県関係部局職員とともに、これまでの受講者評価やそれぞれの経験を踏まえて意見を出し合いながらカリキュラムを検討している。

講師は、本学教員、外部の専門家・実務家が担当している。本学からは、筆者が後述する農業経営版事業計画策定手法に基づく事業計画の策定（合計3回各3時間30分）を担当している他、アグリビジネス学科鶴川教授が会計マネジメント（合計2回各3時間30分）の講義を担当している。講義では、内容に応じて個人演習、グループ討議、ペア討議を取り入れて受講者間の話し合いを取り入れた内容とするなどの工夫を行っている（図3、図4、図5）。

また、講義の実施に際しては、共著者3名が分担して、講師との講義内容の調整や演習の進行など講義・演習全体をコーディネートする役割を担当している。



図4 開講式



図5 講義の様子



図6 受講者によるグループ討議

表2 次世代農業経営者ビジネス塾2016の概要

年	NO	月日	内容	講師
2016年	1	6月8日	開講式・ガイダンス	—
			コミュニケーションマネジメント①ファシリテーション	—
			経営マネジメント①これからの農業経営に求められる価値判断基準	(株)野菜くらぶ 澤浦彰治氏
			経営の強み・弱みを診断する(農業経営管理表100)	秋田県立大学 藤井吉隆
	2	6月13日	会計マネジメント①経営分析・診断	秋田県立大学 鶴川洋樹
	3	6月20日	会計マネジメント②原価計算	秋田県立大学 鶴川洋樹
	4	7月7日	経営マネジメント②経営理念・経営環境分析	秋田県立大学 藤井吉隆
	5	7月14日	経営マネジメント③経営環境分析・クロス分析	秋田県立大学 藤井吉隆
	6	7月21日	経営マネジメント④課題解決策・アクションプランの検討	秋田県立大学 藤井吉隆
	7	8月23日	コミュニケーションマネジメント②組織を向上させるファシリテーション	(株)サラダボウル
	8	9月8日	マーケティングマネジメント①顧客理解・提案のためのマーケティング	東北農業研究センター 磯島昭代氏
	9	10月13日	経営マネジメント⑤事業計画の中間報告	—
	10	10月25日・26日	先進事例視察(山梨県):生産マネジメント①・人材マネジメント②	(株)サラダボウル、(株)アグリビジョン
	11	11月11日	生産マネジメント②5Sとカイゼン活動	(株)サラダボウル 田中進氏
12	11月18日	会計マネジメント③キャッシュフロー会計について	税理士法人日本未来経営 鈴木典男氏	
13	12月7日	人材マネジメント②リーダーシップ力	秋田大学 佐藤修司氏	
14	12月20日	流通マネジメント農産物流通の動向	(株)ドリームリンク 原野正氏	
2017年	15	1月25日	セールスマネジメント 飲食店を対象とした営業活動	(株)ぐるなび・ぐるなび大学
	16	2月17日	経営マネジメント⑥事業計画のブラッシュアップ	—
	17	3月15日	経営マネジメント⑦塾生による事業計画の発表	—
修了式			—	

資料：次世代農業経営者ビジネス塾パンフレットをもとに筆者作成

講義の具体的内容と受講者の評価

以上の農業経営者人材育成支援への取り組みに際しては、筆者がこれまでの業務の中で取り組んできた手法・ツールの活用したものである。講義の具体的内容と受講者の評価は、以下のとおりである。

農業経営版事業計画策定手法

農業経営版事業計画策定手法とは、企業経営の計画策定で用いられているSWOT分析、バランススコアカード策定手法を応用利用して、農業経営の特徴や企業経営とのビジネスサイズの違いを踏まえて、農業経営にも適用できるよう改良を加えたものである。

農業経営版事業計画策定手法では、事業計画策定の手順を8つの段階に大別し、各段階で必要な検討内容、検討の視点を整理したワークシートを活用して、経営理念の策定からアクションプランまで事業計画の策定に必要な要素を体系的に検討するという

ものである(表3)。

当手法を活用することで、受講者の経営展開の方向性、経営課題、アクションプランなどについて、ワークシートを活用しながら総合的に検討することが可能となる。

今回の農業経営者人材育成支援の取り組みでは、①農業経営の実務に従事する受講者が主体のビジネス塾では、手順1～手順8の簡易アレンジ版、②就農準備段階の受講者が主体のフロンティア研修では、手順1～手順3を用いた講義・演習を行い、当該手法の習得を目指すとともに、受講者の事業計画策定に取り組んだ。

その結果、受講者からは高い評価を得られた。例えば、次世代農業経営者ビジネス塾受講者に対する講義評価アンケート結果からは理解度、関心度、役立ち度、満足度のいずれの項目においても高かった(表4)。また、具体的に得られたこととして「これからの農業経営に対するイメージをしっかりと持てるようになった」(フロンティア研修受講者)、「農業経営を考える上でのポイントを理解できてよかった」

(フロンティア研修受講者)、「自分の経営がターニングポイントにあることに気づき、今後の経営方針の参考にしたい」(ビジネス塾受講者)などの評価を得られた(表5)。

しかし、受講者が策定した事業計画内容は、実践に向けた具体性が欠ける場合も多く、今後は、事業計画のレベルアップ、事業計画の実践に向けたフォローアップなどの課題が残されている。

表3 農業経営版事業計画策定手法の内容と手順

手順	内容	使用するワークシート
1	農業経営に対する想い・理念の整理	経営理念抽出シート
2	農業経営の環境分析	農業経営環境点検シート
3	クロス分析による経営課題抽出	クロス分析シート
4	経営強化の全体像整理	経営展開マップ
5	経営目標の設定	経営目標整理シート
6	経営課題の優先順位付け	経営課題整理シート
7	経営課題解決策の検討	スコアカード設定シート
8	アクションプランの策定	アクションプラン策定シート

表4 講義評価アンケート結果

区分	月日	主な内容	理解度	関心	役立ち度	満足度
次世代農業経営者ビジネス塾	7月7日	経営理念、経営環境分析(内部環境)	3.67	3.75	3.54	3.54
	7月14日	経営環境分析(外部環境)、クロス分析	3.60	3.60	3.73	3.47
	7月21日	課題解決策、アクションプランの策定	3.73	3.91	4.00	3.91
未来農業のフロンティア研修	5月10日	経営理念策定:1年目生	-	-	-	3.86
	9月5日	経営環境分析:1年目生	-	-	-	3.55
	5月12日	営農計画ブラッシュアップ:2年目生	-	-	-	3.53

資料：講義評価アンケート(講義終了直後)より筆者作成。
 未来農業のフロンティア研修は、満足度のみ調査。
 注 理解度(理解できた+4~理解できなかった+1)
 関心(関心がある+4~関心がない+1)
 役立ち度(知識が得られた+4~得られなかった+1)
 満足度(満足している+4~満足していない+1)
 の平均値を表す。

表5 講義の感想(事業計画策定)

区分	評価
未来農業のフロンティア研修	これまでの計画のブラッシュアップにつながる具体的な方法を得られたことは勿論、単に数字で営農計画を策定するだけでなく営農する上での想いや理念を整理していく作業が非常に有意義であった。
	この講義を受けて将来の農業経営について以前よりもしっかりとしたイメージが持てるようになった。ビジョン、指針、目標など今後の計画を策定する上でのポイントを理解することができてよかった。
	就農後の収入目標、やりたいことなど漠然と考えていたが、それらをどう具体的に実現していけばいいのか考えていなかったで、講義を受けて考える必要があると感じた。また、グループ討議で経営に対する考えを聞いたことはとても刺激になった。
次世代農業経営者ビジネス塾	自分1人では、手が回らない経営の現状で、今後は単純に規模拡大と人夫の積極的活用を考えていた。しかし、今日の講義で自分の経営が「家族でやっていくのか?、法人化に向かっていくのか?」のターニングポイントであるのだと気づかされた。今後の経営方針の参考にしたい。
	自分がこれまで脅威だと思っていた「農家の減少」は、自らの経営にとって「チャンスなの!!」と捉えられるようになった。明るく帰ってからの仕事がたのしみです。
	前回、前々回から段階を踏んで事業計画を立てる方法を学んだが、今回の講義・演習で、問題点の解決策までわかりやすく出せるようになったため、非常にためになった。

資料：受講評価アンケートより筆者作成

営農計画のシミュレーション

営農計画シミュレーションとは、経営条件(経営面積、労働力、労働条件など)や営農の具体的なデータ(収量、販売価格、費用、労働時間など)に基づき、想定する経営条件や作付面積で農業経営を実施する際の経営指標(売上高、費用、所得など)や労働需給バランスを試算するというものであり、筆者はこれまでの業務の中で Microsoft Excel 上で作動するシミュレーションツールを開発している。

当ツールを活用して営農計画のシミュレーションを行うことで、受講者が就農後に思い描いている営農計画を実施した際の農業所得や労働力の過不足を具体的なデータに基づき把握することができる(図7)。これにより、今後の経営展開や問題点の事前把握、対応策の検討など、営農計画策定への活用を期待できる。

今回の農業経営者人材育成支援への取り組みでは、フロンティア研修1年目生を対象に、農業経営におけるデータ活用の意義と効果および営農計画シミュレーションの手法を解説するとともに、演習により

受講者の就農後の営農計画を試算した。演習では、秋田県が作成している品目別の経営収支、作業時間などの標準値（標準経営指標データ）を利用して、受講者が就農後に想定する経営条件（品目、面積、労働力）で農業経営を行った際の農業所得や労働力の過不足などを試算した。

その結果、受講者からは、「就農後の経営の見通しを立てることができた」、「今後は、自分でデータを収集して、さらに計画を検討していきたい」、「就農後の経営収支を予想することができてとてもよかった」など、講義・演習に対する高い評価を得られた（表6）。

ただし、本年度の講義で作成した営農計画は、秋田県が策定する標準値を用いて行ったものであり、次年度は、2年目生の講義において、受講者の実態に応じたデータを活用するなど営農計画のブラッシュアップを図る予定である。

表6 講義の感想（営農計画シミュレーション）

受講者の感想
営農計画のシミュレーションを行うことで、自分の将来の経営をしっかりと意識できた。シミュレーションツールを使ったデータ入力の方法や根拠に基づく経営の見通しの立て方を学ぶことができた。データを見ることで経営に対する考え方も確実になっていくと感じた。
経営シミュレーションで自分の就農後の経営収支を予想することができとてもよかった。今後は、自分でデータを収集して、さらに計画を検討していきたい。
営農計画のシミュレーションで自分の家の農業経営はどうなっているのか？これから農業経営に関わっていく上で今からしっかりと考えていきたい。シミュレーションにより具体的な数値で把握できるのでとても参考になる。
これからの農業経営はこれまでの農業経営のままではいけないということに納得できたのでそのことを頭に入れながら研修に臨んでいきたい。営農計画のシミュレーションはとても楽しかった。

資料 講義評価アンケートより筆者作成。

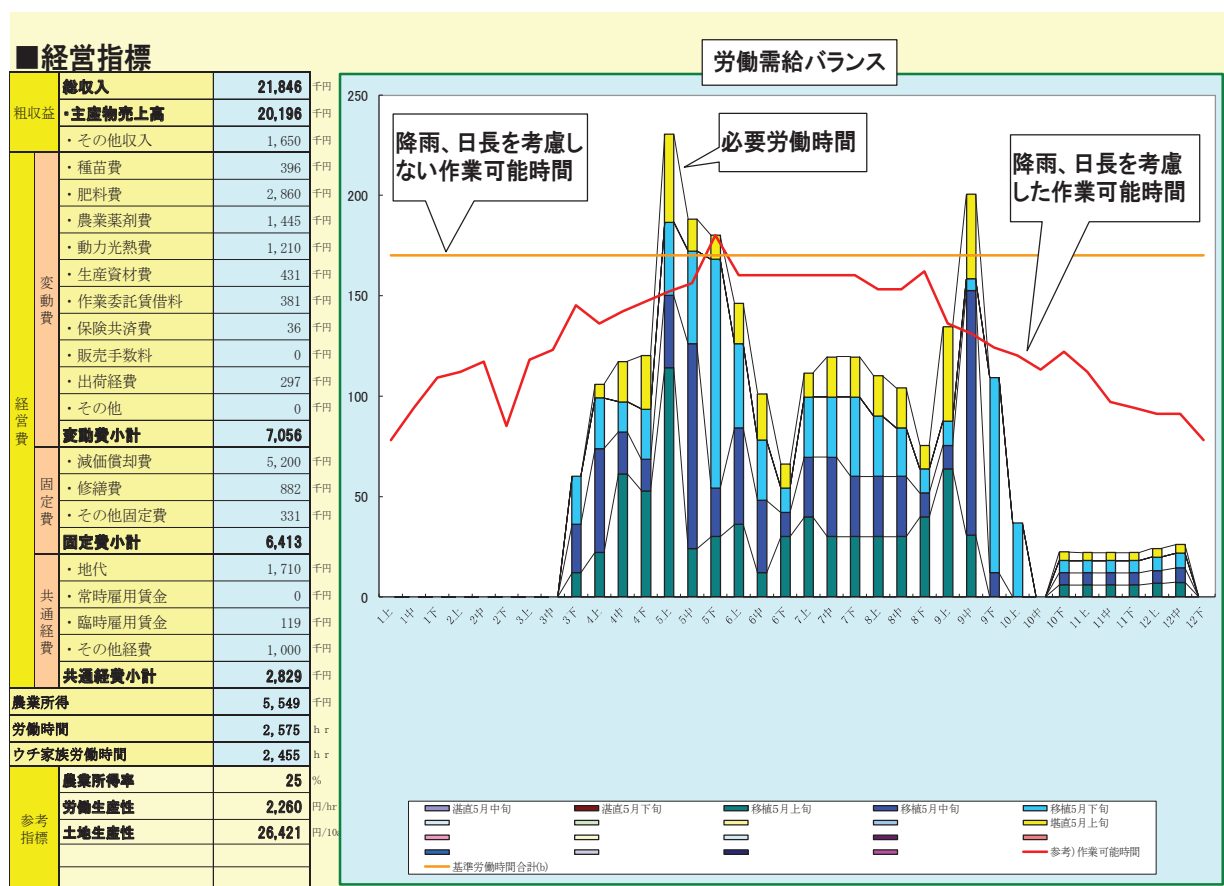


図7 営農計画シミュレーションの試算結果画面例（イメージ）

注 試算結果の画面例を表したものであり、実際受講者の試算結果ではない。

農業経営管理表 100

「農業経営管理表 100」は、現在、筆者が産学連携共同研究推進事業の中で取り組んでいる農業経営における経営管理の実態を体系的に診断するための手法である。

当手法は、①農業経営管理の全体像をマトリックス上に構造化した「農業経営管理表」により経営管理の全体像を示し、②経営管理の具体的内容を提示した合計 100 の「チェック項目」により経営管理の実態を診断し、③数値化した診断結果に基づき経営管理表の各セルを色分けして視覚的に表示するというものである（藤井ら、2016）。

当手法を活用することで、①広範な内容で構成される経営管理の全体像およびその具体的内容に対する理解の促進、②経営により個別具体的な農業経営管理の実態を数値化して客観的に診断することが可能となる。

当手法を次世代農業経営者ビジネス塾の中で活用することで、①受講者の状況に応じて個別具体的な経営の強み、弱みに対する理解の促進、②受講者の学習および経営改善実践への動機付け、③受講者の経営管理レベルに応じたカリキュラムの内容、講義レベルの設定などへの多角的な活用を期待できる（藤井・上田 2016）。

今年度は、「農業経営管理表 100」を試作し、次世代農業経営者ビジネス塾受講者を対象に、第 1 回目の講義（2016 年 6 月 8 日）において実証試験を実施した。

現在、実証試験をとおして得られた結果を分析し、論文として取りまとめているところであるが、当手法の有用性について高い評価を得られており、今後は、実用性の向上に向けた改良に取り組んでいく予定である。

おわりに

本稿では、近年、農業現場で重要性を増している農業経営者人材育成に関わる地域貢献の取り組みについて未来農業のフロンティア研修および次世代農業経営者ビジネス塾への取り組み事例を紹介した。

これらの取り組みは、まだ、堵に就いたばかりで

あり、本稿で紹介したような効果が確認できる一方、課題も残されている。

例えば、ビジネス塾におけるカリキュラムの設計は、これまでの経験に基づき試行錯誤しながら取り組んでいる段階であり、受講者の評価や農業経営のあるべき姿などを踏まえて、更なる改善が必要である。そして、これらの取り組みが、「楽しかった」、「勉強になった」で終わるのではなく、実際の経営強化の実践に波及することが重要であり、効果の検証などへの取り組みも求められる。また、これらの取り組みを通して得られた知見を活用して、農業経営者人材育成のための新たな制度設計、仕組みの構築につなげていきたい。

この他にも、秋田県内の農業高校からは、本稿で紹介した取り組みの一部を高校生向けにアレンジして実施を希望する要請もあることから、今後は、高校、大学、就農希望者、農業経営者までの総合的な農業人材育成の取り組みとして、更なる充実を図っていきたい。

文献

- 秋田県農業研修センター（2016）。「平成 28 年度研修案内」。
- 藤井吉隆・上田賢悦（2016）。「農業経営管理表 100 を用いた農業経営者人材育成プログラムへの接近」『東北農業経済学会講演要旨集』
- 木下幸雄・木村伸男（2014）。「農業経営者向けリカレント教育プログラムの開発と実践」『農業経営研究』52（1・2）,13-20。
- 農林水産省（2016）。「農業人材力強化総合支援事業」『平成 29 年度予算概算要求の概要』
www.maff.go.jp/j/budget/2017/attach/pdf/index-74.pdf。（2016 年 12 月 10 日閲覧）。
- 上田賢悦・渡部岳陽・藤井吉隆・平川謙一・長谷川隆史（2016）「農業経営者人材育成プログラムの開発と課題」『農業普及学会講演要旨集』

〔平成 28 年 11 月 30 日受付
平成 28 年 12 月 22 日受理〕

Efforts To Support Agricultural Managers Within Human Resource Development

The Case of Agricultural Frontier Training and Next-Generation Farm Manager Business Training

Yoshitaka Fujii¹, Takaaki Watanabe², Kenetsu Ueda³

¹ *Department of Bioresource Sciences, Faculty of Agribusiness, Akita Prefectural University*

² *Department of Bioresource Sciences, Faculty of Biological Environment, Akita Prefectural University ,*

³ *Akita Prefectural Agricultural Experiment Station*

With the ongoing changes in the environment surrounding farming, farmers have developed good business sense and a commitment to development of business innovation, and these are important issues within agricultural policy. In Akita Prefecture, training is being conducted according to the level of agricultural growth and development; however, an enhancement and strengthening of these efforts are required. Therefore, we conducted assistance initiatives for agricultural managers to implement human resource development along with divisions of Akita Prefecture. The future of agricultural frontier training for people wishing to farm, including next-generation agricultural management, and to encourage the acquisition of knowledge and methods of farming practice as a business, requires three objectives to be achieved: 1) formulation of a business plan; 2) simulation of the farm plan, and; 3) advancement of agricultural business management. These activities led to high evaluations of these students. One problem is achieving the improvement of the practice for future growth and development of farming, which requires the ability to design more effective agricultural management training.

Keywords: Agricultural Managers Human Resource Development , Formulation of the Business Plan , Farm Plan Simulation, Advancement of Agricultural Business Management